

沖縄から見る日本文化

『沖縄文化論-忘れられた日本』著：岡本太郎(1996年 中央公論社)

金山竜平

この本は、芸術家であり作家でもある岡本太郎が本土復帰となる前のアメリカ軍政下にあるころの沖縄を訪れ、沖縄文化について綴ったレポートである。彼の芸術家の感性に引っかかるもの、沖縄を通して日本が近代化していく中で失ったもの、その対比の中で見えてくるあり方を芸術家である彼の独自の視点で捉えている。彼が沖縄で触れ合う人々やモノ、芸術を通して人間の純粋な生き方がいかに神秘的であるかが述べられている。

この本の中で筆者が一番強調しているのは沖縄文化の実体の「無さ」である。なかでも人頭税は徳川初期に琉球島津侯に征服され苛烈な搾取を受けたことの象徴である。人頭税は島全体に割り当てられ島民の一人でも年貢を納めなかった場合、村全体の責任とされるものであり、冷酷無残なものだった。そうした悲しみや恨みが今なお暗い歴史の重みとして残っている。それにもかかわらず筆者はそうした背景によって生まれた琉球文化を、実体として肌を感じることはできなかった。美しい陶器や絵画といった形として残されていないのは人頭税や昔起きた大津波、戦争のせいだと島民は語る。しかし筆者はこの実体の無さはもっと本質的な問題であり、この何もないところにこそ沖縄文化論のポイントがあると述べている。何もないというのは形として残っていないというだけで文化が残っていないわけではない。ぎりぎりの生活を強いられていた人々が、その生活を乗り切るために生活をしてきたものが、自然な流れのなかで必然的に生まれたものが、偶然美しいものとなっているのである。それは今なお沖縄に残る歌や踊りのなかに見ることができる。

強制労働をさせられ人頭税のとりたてなどにより貧困な生活をしていた当時の人々は、文化や芸術といったものを、絵や陶器などの作品として生み出す余裕などなかった。しかしそれは文化が乏しくなることに直結するわけではない。歌や踊りは生活そのものでありそれなしには生きていくことはできなかった。歌は作業の効率を高めるための掛け声や人間の叫びなどが歌に、踊りは村や島全体の人頭税が納められたときに喜びなどの感情を表現する行動が踊りとして残っている。このように歌や踊りというものは瞬間瞬間に叫び、舞うものであり、それは形として残すものではなく、はかないものであると述べている。

現代の日本に残っている日本舞踊や音楽は、この瞬間のはかないものとしてではなく、着物や楽器の音などによって装飾されており、形式的な美しさを求めるものになってしまっている。これは歌や踊りの持つ、本来の瞬間的な美しさやはかなさを喪失させるものである。元々生活の流れの中で偶然生まれた歌や踊りは人間の感情を単純かつ無邪気に表現しそれにより感動を与えるという芸術の魅力そのものであった。それを潰してしまうような装飾性にまみれた現代の芸術、文化は今一度見直す必要があるのではないか。また、形式美に重点を置きすぎている現代の芸術への人々の見方を改める必要があるのではないだろうか。